

「おわりに」

## 塵となるだろう、しかし恋する塵に

世界には無数の本が存在する。もし、その中から一冊だけ選べと言われたら、僕は迷わず『身体、物語、人生・サントルソ認知神経リハビリテーション・センターの臨床、教育、研究 (Perfetti C, Chiappin S, 2007)』を選ぶだろう。

この本は医師のペルフェッティとその仲間のセラピストたちが、人間の身体、物語、人生と、どう向き合ってきたかを写真と文章で表現したものだ。あるいは、彼らが、日々、何を考えながら、患者たちの治療に携わっているかを紹介した本だ。

そして、その仲間の中に、僕も二〇〇四年から二〇〇五年の一年間入っていた。だから、僕にとってはかけがえのない個人的な経験とともにある本だ。決して忘れることのない記憶と未来に向かう情熱とが攪拌している一冊だ。

だから、僕はあらゆる本の中で、この本が一番好きだ。そして、さらに「この本のす

べてを理解している」と思っている。自分が彼らと同じように患者さんの「身体、物語、人生」に寄り添って臨床、教育、研究をしているわけではないが、心の中ではそう思っている。しかし同時に、「理解していても実践できないこともある」ことも知っている。彼らのレベルに達するには長い時間がかかる。それは目標であり、夢でもあるが、日々のリハビリテーション訓練室での実践が簡単でないことは痛いほど知っている。

ここで紹介しておきたいのは、エピグラムの三行だ。そこには次のような言葉が記されている。

君はニューロンの塊にすぎないのだ (F. Crick 1994)

しかし現在を生き、過去を記憶し、未来を予測することができる (私たち)

塵となるだろう、しかし恋する塵に (F. De Quevedo, Musa IV)

一行目は「脳」についての言葉だ。脳科学者のクリックが発した有名な言葉である。人間の心や行動は、一二〇億のニューロンの活性化の産物だ。世界を認知することも、自分の身体を動かすことも、生きることのすべてが脳のニューロンの産物なのだ。

二行目は「人間（私たち）」についての言葉だ。他の動物は常に現在を生きつづけているが、人間だけが現在を生きると同時に、過去を生き、未来を生きる。その素晴らしさを讃えている。人間は現実のみを生きてはいない。人間は時空を越えて生きているということだ。

三行目は脳や人間が「塵になる」と言っている。人間は最後に「恋する塵」になると言っている。このメタファーの意味は解釈が難しい。塵になるというのは物理的なメタファーだが、恋する塵になるというのは心的なメタファーだ。客観と主観、三人称と一人称、機械と人間といった対比を感じる。また、塵という言葉から美しさは想起しないが、恋する塵という言葉からは美しさが喚起される。

さらに、奥底に、どこか「身体、物語、人生」のイメージが漂っている。ペルフエツティは、人間はやがて、この世界から消え去り、「恋する塵になるのだ」が、そうした人間の身体、物語、人生を讃えているかのようだ。

そこで、この最後の言葉（恋する塵）の作者であるデ・ケベードについて調べてみた。しかし、スペイン人の詩人であることしかわからなかった。だが、ある日、奇跡が起こる。それは「鼠穴房日乗」というブログ（2005-06-13）の中の記述を発見したからだ。

日本語では、全ネット中の唯一の「恋する塵」についての記述であった。このスペイン文学を研究している見知らぬ誰かが存在しなければ、あるいは彼が不意にあることに注意を向けなければ、僕はこの言葉について何も知らないまま死んでいただろう。

彼は、ガルシア＝マルケスの『エレンディラ』に含まれている短編小説『愛の彼方の変わることなき死』という題名が気になったらしい。そして、このタイトルがデ・ケベードの詩の引用であることに気づき、それを翻訳してブログに翻訳していた。

『死の彼方の変わることなき愛』

フランシスコ・デ・ケベード

闇が最後に私の目を閉ざし

明るい昼を奪うだろう

私の魂は解き放たれ

満たされぬ熱情も和らぐだろう

だがかつて燃えあがったこちらの岸に

記憶を捨ててはいかないだろう

私の炎は厳しい掟など顧みず

冷たい水を泳ぐことができるのだから

ある神の全てに囚われていた魂

かくも激しい火に体液を送った血管

栄光に輝いて燃えあがった骨髄

肉体を捨てても思いを捨てはしないだろう

灰になっても感覚を持つだろう

塵になるが恋する塵になるだろう

ガルシア・マルケスはコロンビアの作家で、『百年の孤独』を書いてノーベル賞をとっている。彼はデ・ケベートの詩を愛し、自らの短編小説のタイトルに使うことでオマー・ジュを捧げたのだろう。つまり、デ・ケベートの『死の彼方の変わることなき愛』

の最後の部分を、ペルフエッテイが引用していたということである。

写真集『身体、物語、人生』を翻訳した小池美納さんは、この最後の部分を次のように翻訳している。微妙に違うが、僕は小池さんの訳の方が好きだ。

『塵となるだろう、しかし恋する塵に』

Polvo serán, mas polvo enamorado

写真集『身体、物語、人生』サントルソ認知神経リハビリテーション・センターの臨  
床、教育、研究』のページをめくると、この言葉とセラピストは出会う。

そして、僕は、昨年、父が亡くなって灰になった時、この言葉の本当の意味を理解した。「塵」という言葉の感覚に、父の記憶が貼りついたからである。

いつか、僕も 恋する塵 になるだろう。

いつか、あなたも 恋する塵 になるだろう。